

第3回 大分県庁支部 安部 舞 (大58) (2020.3.23)

～最後の授業～

10年前の2010年3月、私は大分大学を卒業した。

卒業直前の授業における先生からの贈る言葉は、私の人生の転機において意識する言葉となっている。

社会に出る君たちへの最後の授業。

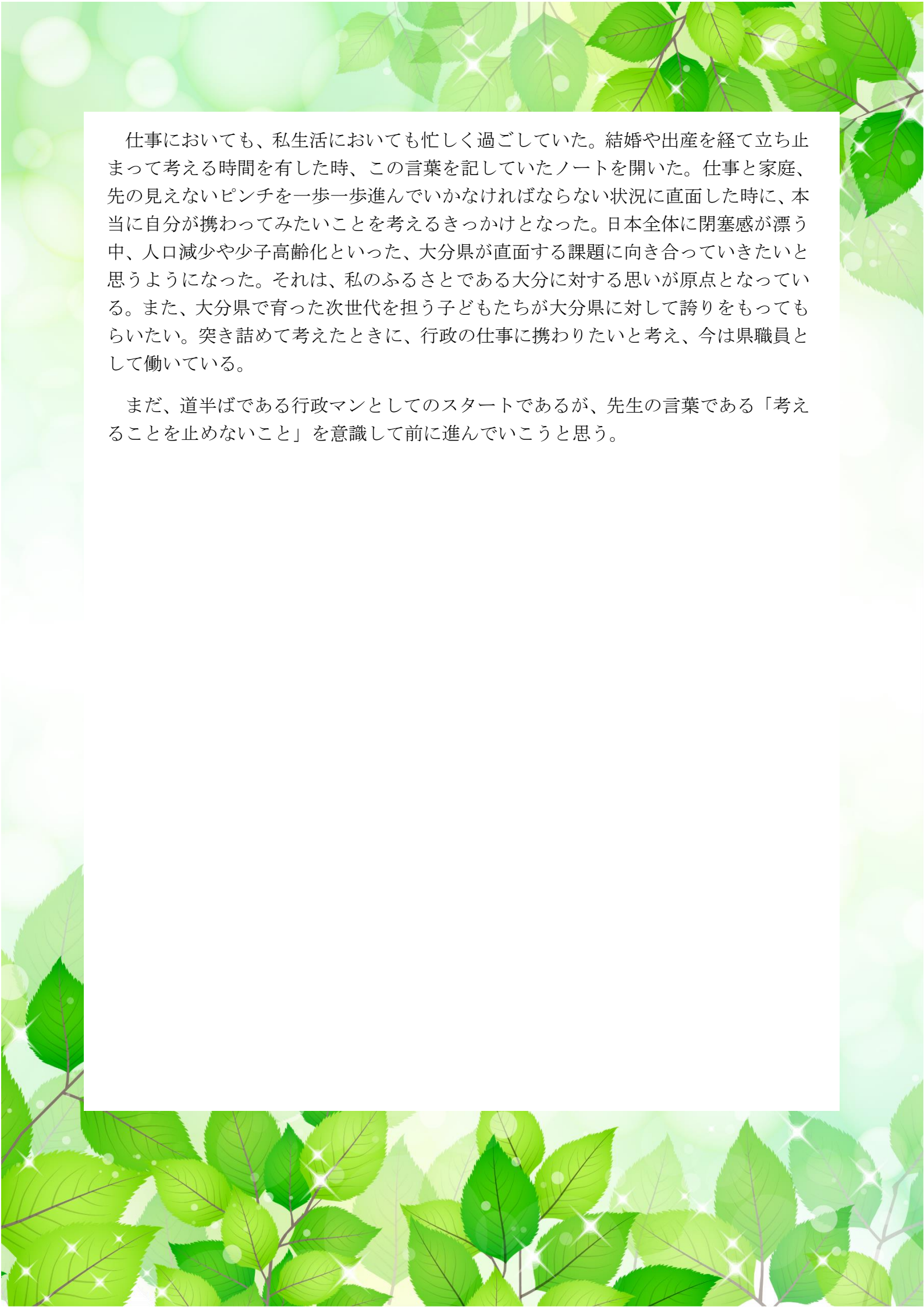
今の時代は、インターネットの発達によって、何でも検索してすぐに答えが出てくる時代になった。だからこそ調べた事実を2歩、3歩と深堀し、それはなぜだろうと分析する力が必要になってくる。今後の人生では、情報に接した際に、それが本当かどうかまずは疑うこと。本当なのか？なぜなのかという考える習慣をつくること。自分の頭で考えて選択をしていかなければならない。考えることを止めずに、自分の人生を歩んでほしい。

当時はその言葉の意味や深さを考えることもなく、これからの社会人生活への不安と期待に心を躍らせる毎日であった。ただ、常日頃から先生がおっしゃっていた「考えることを止めない」という言葉をノートの最後に記し、大学を卒業する日を迎えた。

当時の就職活動は大学3年生の10月解禁であった。大量退職を控えている日本企業において、前年までの売り手市場が続くと多くの学生は感じていた。しかし、就職活動の号砲が鳴る直前である9月、リーマンショックが起こる。株価は急降下し、私たち世代の就職活動は、厳しいスタートを切ることとなった。

連日伝えられる不景気の入り口のような報道とともに、年越し派遣村や、大学生の内定取り消しのニュースが取り上げられる日々であった。混沌とした中でスタートした私の就職活動は、困難を極めた。私のエントリーシート通過率は10%程度であり、面接に進むことができても最終面接で落ちることを何度も経験し、就職活動の洗礼を大いに受けた。そんななか、私は唯一内定を得ることのできた金融機関へと就職することができた。

社会に出てからの毎日は、学生時代と比較しニュースや情報に触れる機会が格段に増加した。就職してからの10年の間にも携帯電話はスマートフォンに、連絡手段はメールや電話からメッセージアプリが主流となった。情報の量は膨大となり、速度も格段に速くなっている。目まぐるしく変化する技術革新、便利になる世の中に抗うことはできない。



仕事においても、私生活においても忙しく過ごしていた。結婚や出産を経て立ち止まって考える時間を有した時、この言葉を記していたノートを開いた。仕事と家庭、先の見えないピンチを一步一步進んでいかなければならない状況に直面した時に、本当に自分が携わってみたいことを考えるきっかけとなった。日本全体に閉塞感が漂う中、人口減少や少子高齢化といった、大分県が直面する課題に向き合っていきたいと思うようになった。それは、私のふるさとである大分に対する思いが原点となっている。また、大分県で育った次世代を担う子どもたちが大分県に対して誇りをもってもらいたい。突き詰めて考えたときに、行政の仕事に携わりたいと考え、今は県職員として働いている。

まだ、道半ばである行政マンとしてのスタートであるが、先生の言葉である「考えることを止めないこと」を意識して前に進んでいこうと思う。